

京都府公立大学法人若手研究者・地域未来づくり支援事業研究成果報告書

	(所 属)	(職名・学年)	(氏 名)
研究者 (研究代表者)	京都府立医科大学附属北部 医療センター・神経内科	医長	小泉 崇
研究の名称	丹後地域の中高齢者を対象とした認知機能低下および老化の要因を探るための縦断的疫学研究（丹後生き生き長寿研究）		
研究の キーワード	丹後生き生き長寿研究、長寿、認知機能低下、老化、要因		
研究の概要	<p>本研究は平成24年度より開始した地域課題関連疫学研究を基に展開する縦断研究である。丹後地域（伊根町・京丹後市・宮津市・与謝野町）の初老期集団（開始時点で60歳以上65歳未満）を対象に、認知機能、身体機能、栄養状態、健康意識など、老化に関する項目を定期的に追跡調査する。高水準の高齢者率と長寿地域として知られる丹後地域での加齢による変化の特長を疫学的に明らかにし、これからの「生き生き長寿」社会を創ることを目的とした。</p>		
研究の背景	<p>高齢化社会において認知機能低下および老化の要因をとらえることはきわめて重要な課題である。</p> <p>どのような経過で認知症が発症するのか、認知症には至っていないが軽度認知機能低下があるという、いわゆる軽度認知障害MCI (Mild Cognitive Impairment) の人々がどのような経過をとるのか、MCIが認知症へどのように移行して行くのか、といった検討は、世界各国で行なわれているADNI (Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative) 研究にみられるように大変注目を集めている。そうした研究のためには、人口流動の少ない地域で経時的に追跡する疫学調査が望ましい。こうした目的で、本邦では久山町研究が1961年からスタートして約50年間、コホート研究がなおも続けられており、認知症に関しては65歳以上の高齢者の有病率あるいは20年後の追跡調査という形で報告されている。</p> <p>一方で京都の丹後地域は高齢化が進み、日本の将来の高齢化社会モデルともいべき地区であり、高齢者の疫学調査には適したフィールドである。2010年の国勢調査によると、高齢者率（65歳以上の割合）は、伊根町で42.7%、与謝野町で29.9%、京丹後市や宮津市を含め丹後地区全体では平均で31.7%であった。また100歳以上の長寿者が全国平均のおよそ2.8倍と高水準の長寿地域としても知られている。老化と丹後地域の特長についての関係性は非常に興味深く、この点において久山町とは違った特徴を有する。このように長寿地域における特徴を掴むことが、今後の老化研究の一助となると考えた。</p>		

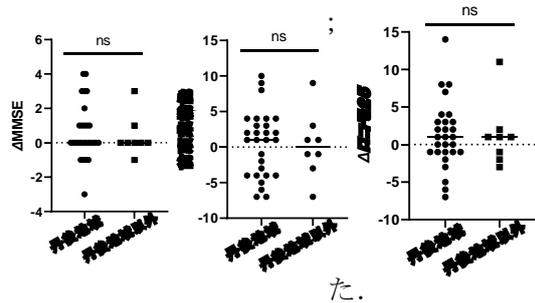
研究手法	<p>本研究では初老期集団（原則は前期高齢者の60歳代）を対象に神経心理検査による認知機能評価および老化・老年病の評価，観察を行う．長期間にわたる定期的な健診事業にて追跡調査を行なうことで，この地域での高齢者の認知機能低下および老化の疫学的特長を明らかにすることを目的とすることで「生き生き長寿」社会を創ることを目的とする．</p> <p>【対象】京都府丹後地域（伊根町・京丹後市・宮津市・与謝野町・弥栄町）の初老期である60歳から64歳の男女全住民（約9000名）のうち，調査対象地区の被験者となる母集団は3125名で，調査開始2年（2014年・2015年度）をかけて全地域を一巡した時点での被験者は442名（男性172名，女性270名），全体の14.1 %であった．これらの健診参加者を対象とした．</p> <p>【方法】研究事務局を京都府立医科大学附属北部医療センター内に置き，以下の方法で実施する．2市2町とは研究事業が滞りなく遂行できる体制は既に構築されており健康福祉の担当部署と連携し対象者を把握し、北部医療センター内の研究事務局より対象者への健診案内および関連書類の郵送を行う．各個人に郵送する研究説明書・参加同意書・アンケート（健康・栄養・生活環境・血圧・認知症などに関する調査）は既に作成され承認を得ているものを引き続き使用する．医師，臨床心理士および精神保健福祉士，保健師，管理栄養士，理学療法士（各々4～5名）による健診を開催する．各地域の公民館などで健診会場をその都度設営し2年毎の追跡を行う．令和2年度は3カ所で開催した．京都府立医科大学および附属北部医療センター職員が協力し合い，全例に対して神経心理検査（Cornell Medical Index, Word Fluency Test, Mini Mental State Examination, 簡易Clinical Dementia Rating- Japan), 神経診察，生活習慣調査，栄養調査や運動機能評価（ロコモ度テスト）を行う．健診結果から神経疾患あるいは認知機能低下が疑われる参加者に対して京都府立医科大学附属北部医療センターにて精査を受けるよう案内する．特に認知機能低下を疑う場合はClinical Dementia Ratingや頭部MRIによる精査を行う．</p> <p>経時的に得られるデータをとりまとめ，認知症の進行率および身体機能の低下率と進行する集団にみられる特徴を評価する．さらに丹後地域で得られたデータと別地域のデータを比較する事で長寿の秘訣を探った．</p>
------	--

コロナ感染症流行の影響で、規模の縮小・参加者の減少はやむをえなかったが、京丹後市丹後町、宮津市府中・日置地区、伊根町の3会場で実施し合わせて約100名の方が参加した。

これまでの数年の結果は学会・論文発表を行っているが、「認知機能の低下が運動機能（ロコモ度）の低下に相関する」（2019年発表）、「アルコール極度量摂取群では認知機能低下との関連がある可能性がある」ということが示唆されるデータ（2021年発表）など注目すべき結果も出つつあり、さらなる成果が期待される。

研究の成果
(実現できた研究の質の向上又は地域振興の内容等)

① 認知機能低下・老化の遺伝的要因：認めず



遺伝的要因が無いが、出身地別に認知機能（MMSE, 前頭葉機能）および身体機能（ロコモ25値）の変化を見たところ有意差はなかった。
後天的な要因によると考えられた。

- ② 前述の疾患または状態の経時的変化：数値はむしろ改善。
；定期的に健診を実施することで、被検者の意識付けができた結果と考えた。
- ③ 前述の疾患または状態にみられる臨床的特徴，危険因子の解明（食生活，社会生活など）：アルコール消費量が少ない。
；適度な飲酒が長寿の秘訣の可能性

アルコール消費量	男性	女性
丹後地域	1.36	0.20
日本全体（60歳台）	1.46	0.73

今後の期待

地域還元という観点では、集団健診を開催することで、健診結果を受診者にフィードバックすることができ、さらには老年病や神経疾患の発見につなげることができる。二次検診も含め健診結果を踏まえ、必要であれば適切な医療機関への受診を案内する。健診のみならず認知症や老化予防を目的とした生活相談，生活指導等も行なうことができる。また、健診会場にて認知症に関するトピックスや重要な要因である生活習慣病について健診時にミニレクチャーを開いてさらなる理解を深めてもらう予定である。こうした点でも地域貢献・地域振興の一助となることが期待できる。

研究発表

- ・活き生きかわら版 vol.6（京都北部医療センター発行）
- ・第62回日本神経学会学術大会. タイトル『京都丹後地区中高年者の飲酒量と認知機能の関係』